

## 愛媛大学教育学部附属幼稚園における養育者の発達

(教育心理学)	江上園子
(幼児教育・附属幼稚園)	深田昭三
(教育心理学)	橋本巖
(松山市立宮前小学校・元附属幼稚園)	山本千鶴子
(松山市立窪田小学校・元附属幼稚園)	近江理恵
(附属幼稚園)	松浦道子
(附属幼稚園)	相原洋子
(附属幼稚園)	西野教大
(附属幼稚園)	遠藤美奈子
(附属幼稚園)	酒井裕子

### Development as a Parent at Kindergarten Attached to Ehime University

Sonoko EGAMI, Shozo FUKADA, Iwao HASHIMOTO,  
Chizuko YAMAMOTO, Rie OHMI, Michiko MATSUURA,  
Yoko AIBARA, Norihiro NISHINO, Minako ENDO *and* Yuko SAKAI

(平成23年6月10日受理)

#### 要約

愛媛大学教育学部附属幼稚園における保護者の、親としての発達的な変化について検討を行った。愛大附属幼稚園では、「親育てプログラム」として、さまざまな試みが行われている。そこで本研究では、1年間の間に保護者の養育信念や養育態度がどのように変化したのか、父親・母親の違いに焦点を当てて検討を行った。また、家族システム論を援用し、父母間の相関についても縦断的に検討した。さらに、附属幼稚園の活動や行事において、保護者にとって有意義だと思われたものを取り上げながら、親としての発達の様子を論じた。結果として、父親と母親では育児にかかわる項目の縦断的な変化や有意義だと評価した園の活動・行事に違いはあるものの、第1回目の調査時よりも第2回目の調査時の方が、父母間で育児において相関する項目が明らかに増えていることがわかった。

#### 問題

従来の親子関係にかかわる研究では、子どもに焦点が当てられ、親は「子どもを育て、影響を与える存在」として扱われるのみであった。ところが近年、子どもに影響を与えるだけの存在としての親という視点から、子育てを担う親自身も成長・発達していく存在であるという指摘やそれにかかわる研究が散見されるようになってきている。例えば、柏木・若松(1994)では、親になることで柔軟性や自己抑制などが発達するということを明らかにしている。小野寺(2003)では、気質的な側面にかかわる自己概念は親となっても変化が見られなかったものの、親としての役割意識の変化が見られることがわかった。

これらの研究に共通する結果として、父親と母親では変化の程度ならびにそれにかかわる要因などが異なるということも見逃せない。Terry(1991)によると、親になるという移行にかかわり、肯定的な感情のみをもつ父

親に対して、母親は否定的な感情も併せもつということが報告されている。これは、未だに母親が“養育の主体”であり、父親は“その協力者”であるという傾向のあらわれであると解釈される。柏木・若松 (1994) でも、親としての成長が多く見られるのはいずれの側面でも母親の方であるという。小野寺 (2003) では、父母双方がもつ役割意識に関して、男性は父親になってからも「父親としての自分」の大きさは変わらず、「社会にかかわる自分」のみが大きくなり、その一方で女性は「母親としての自分」が大きくなり「社会にかかわる自分」が小さくなっているという。

もっとも、Lamb (1975) の“父親の再発見”以来、父親が子どもに与える影響についての研究も進展し、知見として蓄積されてきており (例えば加藤・石井クンツ・牧野・土谷, 2002; Lewis & Lamb, 2003), Parke (1996) も父親のかかわり方の質や量が子どもの社会的な発達や認知的な発達に与える影響の大きさについて述べているが、とくに我が国では現実的に母親が育児の主体であるという印象は否めない。その一方で、「子どもともっとかかわりたい」という父親も増えている (大野, 2008) が、現実的に多忙な仕事状況下にいる多くの父親においては、子どもとかかわる時間の捻出が不可能に近い。そしてそれは、各家庭における夫婦間の努力だけで解決が見込めるものでもない。我が国でいえば、労働条件の緩和、福利厚生の実施などが社会全体として望まれるが、それ以外でも、例えば子どもを中心とした地域社会とかかわりに父親が出て行きやすいようにする、あるいは幼稚園・保育園において、子どもの前で父親が活躍することができる場を提供するなどという方策が想定されるのではないだろうか。また、母親も、育児というものは父親ももちろん、地域社会や第三者とともにやるものだという認識を持てるように促すことが必要ではないか。

ところで、幼稚園は、子どもにとっても初めての集団生活であると同時に保護者にとっても初めてのPTA活動への参加の場となる。愛媛大学附属幼稚園では、PTA活動に対してその意義を感じながら積極的に参加する保護者の割合が低下してきているとの懸念から、PTA活動を「親育ての場」として有効にとらえ、保護者が積極的によりよく子どもたちにかかわるため、子ども同士

や保護者同士がよりよい影響を与え合えるようにするため、何が必要なか検討を続けている。その結果、さまざまな独自の取り組み、附属幼稚園ならではの活動・行事をこれまで行ってきた。しかしながら、それらの取り組みが保護者にとってどのように評価されているのか、さまざまな活動・行事の中でもとくに保護者にとって有意義なものはどのようなものなのか、それはなぜなのか、といった視点からの詳細な分析は行われていない。また、それらの活動を通して、保護者に実際にどのような変化があったのか、養育者としての発達は遂げているのか、といった点も検討されていない。

以上のようなことから、本論文では、愛媛大学附属幼稚園における保護者 (父親および母親) を対象に、養育者としての変化の姿を、父親と母親という違いも分析の軸として取り入れながら、審らかにしていきたい。具体的には、1. 父親・母親別に、附属幼稚園でのさまざまな活動・行事を経験する前後で養育信念、子どもへの期待、養育態度、省察傾向にどのような変化が見られるかを検討すること、2. 父親と母親の養育信念、子どもへの期待、養育態度、省察傾向は相関関係にあるのかについて縦断的に探ること、3. 附属幼稚園ならではの活動・行事について、保護者にとって有意義なものを調べることの3点について研究を行うこととした。養育信念については「母性愛」信奉傾向 (江上, 2005, 2007) を取り上げ、その他、子どもへの発達期待 (柏木・東, 1977)、養育態度 (中道・中澤, 2003)、子育てにおける省察 (朴・杉村, 2009) など、育児にかかわる多くの側面を変数として検討を行っていく。

## 方法

**被調査者** 愛媛大学教育学部附属幼稚園の保護者240名 (うち父親120名, 母親120名)。有効回答数は父母のデータが第1回目の調査と第2回目の調査とも揃っており、欠損値がない保護者としたため、夫婦120組となった。父親の平均年齢は40.1歳 (範囲: 25-63, *SD*: 5.51)、母親は36.8歳 (範囲: 25-46, *SD*: 4.96)、父親の就業形態は常勤職が120名、母親の就業形態は常勤職が15名、パートタイムが8名、無職が97名であった。父親の教育歴は大学卒が65%、大学院卒が16%、高等学校卒が9%、専門学校卒が3%であった。母親では、大学卒が

45%，短大卒が24%，専門学校卒が11%，高等学校卒が6%，大学院卒2%であった。子どもの数の平均は2人（範囲：1-5人）であった。対象となる子どもの平均年齢は5.15歳（範囲：3-6，SD：0.78）で、対象となる子どもの性別は男児が68名，女児が52名であった。なお，これらの基礎データは第2回目の調査のものである。

**実施時期** 第1回目の調査は2010年7月に行い，第2回目の調査は2011年3月に行った。

**手続き** 愛媛大学教育学部附属幼稚園を通して，保護者への協力を依頼し，各クラスの担任が質問紙を配布・回収・管理した。なお，質問紙には無記名であること，回答は強制ではないことなども明記している。

**質問紙** 質問紙は，父親と母親で内容的に同一のものを各回につき一部ずつ配布した。内容は，「母性愛」信奉傾向尺度（江上，2005，2007），13項目からなるもので5件法，親の養育態度尺度（中道・中澤，2003），15項目からなるもので5件法，子どもの発達期待尺度（柏木・東，1977），41項目からなるもので3件法，子育て省察尺度（朴・杉村，2009），32項目からなるもので5件法であった。この他，年齢や就業形態・教育歴などのフェイスシート項目，附属幼稚園での活動に対する認知（附属幼稚園での活動・行事について「楽しかったもの」「保護者として意義があると感じたもの」について質問）にかかわる項目も含むものであった。

**附属幼稚園の活動・行事** 第1回目の調査と第2回目の調査の間に実施された附属幼稚園の活動・行事は下記の通りである。

①4月の参画日，②親子作業，③親子遠足，④参画週間，⑤年長児お買い物ごっこ，⑥夜のつどい，⑦運動会，⑧附幼市，⑨学芸会，⑩誕生会，⑪もちつきの会，⑫個人懇談，⑬家庭訪問，⑭思い出試写会，⑮食育参画日，⑯どんぐりの会，⑰始業式・終業式

これらのなかで説明が必要なものについては，以下に詳しく述べていく。

①4月の参画日 子どもも保護者も新しい環境と不安を抱えながら登園している。特に新入園児は不安でいっぱいである。その不安を和らげ，園生活に期待がもてるよう，保護者と子どもと一緒に遊ぶ時間を設定している。保護者が子どもと同じ目線で園生活を見たり，楽しんだ

りでき，その後の学級部会では，担任からの保育方針や子どものかかわり方についての説明がなされる。

②親子作業 子どもたちの保育・教育が良い環境で行われるよう，親子で片付けや掃除をする。子どもにそれらの仕方を教える良い機会となり，保護者は自分たちが園のためにしているという意識が高まる。

④参画週間 子どもたちの生活を肌で感じてもらう。一度に大勢の保護者がかかると子どもたちの遊びの様子が変化するので，小グループに分かれていただき，お母さん先生・お父さん先生として子どもにかかわる。グループで前もって担任と相談をしての保育プランを持つ。4月よりもかかわる子どもの人数が増えている。弁当を持っての参画もできる。全体が降園した後，担任とのかかわりの様子や保護者としての気付きを話し合う。

⑥夜のつどい 年長児が出店や活動を企画し，年中児・年少児と協力して遊びを進めていく。活動の終盤では，保護者の協力を得ながら，やぐらを囲み，花火と踊りを楽しむなど，交流を行う。保護者はPTAのつながり等を通して，保護者同士の関係，子どもとの関係をはぐくんでいく。

⑧附幼市 保護者の手作りの品や不用品のバザーを標記の名前で呼んでいる。手作りの品は，附属小学校で必要になる名札台紙などもある。手作りの品は袋やエプロン，ランチョンマット，ぬいぐるみなど多岐にわたっている。収益金は，子どもが使う遊具・道具・教具や保護者が必要とする物品の購入に充てている。保護者は，手作りの品を教え合いながら作っていた。

⑮食育参画日 保護者が，子どもの弁当作りや食育について考えるきっかけとする。栄養や食育について愛媛大学教員の講話を聴く。（講話以前に食育に関する疑問や子どもの食事に関する悩みなどを尋ねるアンケートを実施している。）その後，親子で一緒に弁当を食べる。

⑯どんぐりの会 PTA主催で行う会で保護者の趣味を広げたり教養を高めたり，子育ての不安を話し合うといった，かわいいどんぐりが大木に育つのを夢見ながら保護者が気軽に参加できる会である。

## 結果

**記述統計** 各尺度について，先行研究を参考に主成分分析および因子分析を行った。その結果，「母性愛」信

Table 1 各尺度の記述統計量 (父親)

	第1回調査時	第2回調査時	$\alpha$	$t$ 値
「母性愛」信奉傾向	42.3 (8.29)	42.8 (8.17)	.90	$t = -0.86$
養育態度 (応答)	30.1 (3.44)	30.0 (3.57)	.75	$t = 0.31$
養育態度 (統制)	29.3 (2.99)	28.9 (3.14)	.77	$t = 1.34$
子どもへの発達期待	43.9 (8.00)	43.2 (8.65)	.92	$t = 0.93$
省察 (親自身に関する)	39.0 (5.46)	38.5 (5.41)	.88	$t = 1.37$
省察 (子どもに関する)	44.4 (4.99)	43.7 (5.05)	.88	$t = 1.74+$
省察 (他者を通した)	37.8 (7.33)	37.9 (7.54)	.93	$t = -0.31$

+  $p < .10$

Table 2 各尺度の記述統計量 (母親)

	第1回調査時	第2回調査時	$\alpha$	$t$ 値
「母性愛」信奉傾向	43.2 (9.62)	42.8 (10.25)	.94	$t = 0.77$
養育態度 (応答)	31.0 (3.52)	30.8 (3.10)	.85	$t = 0.69$
養育態度 (統制)	29.9 (2.93)	29.9 (2.79)	.63	$t = -0.18$
子どもへの発達期待	45.5 (8.27)	44.3 (7.93)	.89	$t = 2.09^*$
省察 (親自身に関する)	40.5 (5.86)	39.7 (5.39)	.89	$t = 1.82+$
省察 (子どもに関する)	45.6 (5.46)	45.1 (5.19)	.88	$t = 1.21$
省察 (他者を通した)	43.1 (6.75)	41.9 (6.20)	.88	$t = 2.22^*$

+  $p < .10$ , \*  $p < .05$

奉傾向尺度と子どもの発達期待尺度は一次元性が確認され、親の養育態度尺度は「応答」と「統制」の2因子構造、子育てにおける省察尺度では「親自身に関する省察」と「子どもに関する省察」、「他者を通した省察」の3因子構造が見出された。これらの結果に基づき、父親・母親の別ならびに調査の回別に各尺度のCronbachの $\alpha$ 係数、平均値と標準偏差を算出し、Table 1 (父親)およびTable 2 (母親)に示した。

t検定 父親・母親別に調査時期 (第1回目・第2回目) による変化を見るため、それぞれの尺度得点におい

て対応ありのt検定を行った。その結果について、t値をTable 1およびTable 2にて示している。Table 1およびTable 2より、母親の方が変化したものが多いということが分かった。具体的には、母親においては子どもへの発達期待が有意に低下していること、他者を通した省察も有意に低下していることがわかった。また、親自身に関する省察も低下している傾向が見られた。一方で父親の場合は、子どもに関する省察が低下している傾向が見られるのみであった。

相関係数 父親と母親とで、同じ尺度においてどれだ

Table 3 父母間における各尺度の相関関係 (1回目調査時)

	「母性愛」	養育 (応答)	養育 (統制)	発達期待	省察 (親自身)	省察 (子ども)	省察 (他者)
「母性愛」	.258**						
養育 (応答)		.069					
養育 (統制)			-.011				
発達期待				.134			
省察 (親自身)					.048		
省察 (子ども)						.054	
省察 (他者)							.042

\*\*  $p < .01$

Table 4 父母間における各尺度の相関関係( 2回目調査時)

	「母性愛」	養育 (応答)	養育 (統制)	発達 期待	省察 (親自身)	省察 (子ども)	省察 (他者)
「母性愛」	.364**						
養育 (応答)		.089					
養育 (統制)			.151				
発達期待				.277**			
省察 (親自身)					.231*		
省察 (子ども)						.170+	
省察 (他者)							.171+

+  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

けの相関がみられるか、相関係数を算出した。その結果をTable 3 (1回目調査時)ならびにTable 4 (2回目調査時)に示した。これらの結果より、1回目の調査時と比較して2回目の調査時の方が、父親・母親間における相関関係が認められる尺度が増えるということが明らかになった。具体的には、1回目の調査時では「母性愛」信奉傾向のみが夫婦間で有意な正の相関関係にあったが、2回目の調査時ではこれに加えて、子どもの発達期待、親自身に関する省察においても有意な正の相関関係が認められ、さらには子どもに関する省察と他者を通しての省察においても有意傾向ではあるが相関関係が見られることがわかった。

**度数分布** 父親・母親別に、各調査時における「楽しみにしている(楽しかった)活動・行事」ならびに「保護者として意義があると感じる(意義があると感じた)活動・行事」の度数分布を調べた。第1回目の調査において、父親では「⑦運動会」(45%)が「楽しみにしている活動・行事」としてもっとも多く、以下、「⑥夜のつどい」(18%)、「⑨学芸会」(12%)と続く。実際にさまざまな活動や行事を体験した後の第2回目の調査における「楽しかった活動・行事」としては、「⑦運動会」(49%)がもっとも多く、「⑥夜のつどい」(22%)が次に続く結果となった。この2つの活動・行事でほぼ過半数を占めることとなった。「保護者として意義があると感じる活動・行事」としては、第1回目調査時には「⑦運動会」(12%)、「⑫個人懇談」(12%)であった。これらが第2回目調査時における「保護者として意義があると感じた活動・行事」では、「⑥夜のつどい」(12%)、「⑦運動会」(12%)、となり、変化していることがわかった。

一方、母親では、第1回目の調査において「⑨学芸会」(26%)、「⑦運動会」(22%)、「⑥夜のつどい」(18%)の順で「楽しみにしている活動・行事」が挙げられていた。そして実際に体験した後の第2回目の調査における「楽しかった活動・行事」でも、「⑨学芸会」(22%)、「⑦運動会」(20%)、「⑥夜のつどい」(18%)が挙げられていた。また、1回目調査時の「保護者として意義があると感じる活動・行事」としては、「④参画週間」(45%)・「⑩誕生会」(13%)の順で多かった。経験後の2回目調査時でも、「④参画週間」(26%)・「⑩誕生会」(13%)の順で多かった。これ以外に、「保護者として意義があると感じるもの」としては3%程度しか挙げられていなかった「⑩どんぐりの会」が、実際に体験した後は「保護者として意義があると感じたもの」として6.8%も挙げられていたことがわかった。

### 考察

本論文の目的は、1. 父親・母親別に、附属幼稚園でのさまざまな活動・行事を経験する前後で養育信念、子どもへの発達期待、養育態度、省察傾向にどのような変化が見られるかを検討すること、2. 父親と母親の養育信念、子どもへの発達期待、養育態度、省察傾向は相関関係にあるのかを縦断的に探ること、3. 附属幼稚園ならではの活動・行事について、保護者にとって有意義なものを調べることの3点であった。以下に、調査結果より考察できることを順に述べていく。

第1回目の調査と第2回目の調査での尺度得点の変化については、父親ではほとんど見られなかった。附属幼稚園では保護者も共に参加できるさまざまな行事・活動

が用意されており、それに参加している父親も多いが、考え方や接し方の変化としてあらわれるほどにはその影響力が見られなかったということだろう。一方、母親では、子どもへの発達期待が低下したうえに、他者を通じた省察も低下している。発達期待の低下の要因としては、単純に子どもが1回目調査時から2回目調査時までの間に成長したという面と、附属幼稚園でのさまざまな活動・行事を通じて、自分たち以外の他の子どもの姿や成長の様子を目にすることで、一般的な子どもの発達にかかわる知識が向上したことなども想定されるであろう。他者を通じた省察については、朴・杉村(2009)によると、子育てにおいて育児書や雑誌から情報を得たり、直接他の親子の行為を目にしたり、会話を聞いたりすることによって自分の育児に活かす、また、子どもを育てている親同士の交流を通して子育てに関する有用な情報を交換し、子育てにおける様々な問題の解決を模索する、ということのあらわれであるという。これが低下している点については、第2回目調査時には時期的にすでにこのような省察を附属幼稚園での活動・行事を通してすでに行っている(行っていた)ということの結果ではないかと思われる。つまり、母親がこれらの省察を行うのは、行事や活動に参加しているまさにそのときであり、行事や活動がすべて終了した3月時にはその傾向が落ち着いているというのが解釈として考えられることである。上記のように、養育信念や省察傾向では、とくに母親においては縦断的な変化は見られたものの、養育態度では父親・母親ともに変化はまったく見られなかった。園としてさまざまな活動や行事を用意していても、やはり1年弱という期間では、子どもへの接し方に作用するほどの大きな影響力は有していないということだろうか。

次に特筆すべきこととして、父親と母親の養育信念や子どもへの発達期待、養育態度、省察傾向などの相関について、興味深いことに、第1回目の調査時よりも第2回目の調査時の方が、父母間で相関するものが明らかに増えている。「母性愛」信奉傾向に関しては、構成される項目内容から概念としては性役割態度とも近似しているものであるため、夫婦間で一致している方が家族システム的には望まれよう(Belsky & Kelly, 1995)。そのため、両調査時においても相関が認められるという結果は想定されることでもあるだろう。しかし、第2回目の調

査においては、それに加えて子どもへの発達期待、省察傾向なども相関しているということが明らかになったのである。これには、附属幼稚園のさまざまな活動・行事を通じて夫婦と子どもとで時間を共有したことで、その経験の感想や話し合いなどから、夫婦間の考え方が一致してきているという姿が推察されよう。これは、家族システム論(亀口, 1992)の観点からも、家族内での信念・行動の作用過程として説明できるだろう。数井・無藤・園田(1996)が主張する、家庭における親子関係や養育のダイナミズムとも一致する結論である。附属幼稚園の場合には、父親が常勤職、母親が専業主婦である夫婦が多いことから、夫婦で子どもの姿を観察したり、父親・母親の区別なく子どもとかわったりする機会を設けている附属幼稚園の活動・行事は、日ごろ仕事に忙殺されているだろう父親にとっては、とくに大変有意義であると考えられる。

そして附属幼稚園ならではの活動・行事については、父親と母親における感想や考え方の違いが見られたということも意味深い結果だと言える。父親では「楽しみな(楽しかった)」活動・行事と「保護者として有意義であると感じる(感じた)」活動・行事が同じ「⑦運動会」であったが、母親では両者で挙げる活動・行事に違いがあった。これには、現代では未だに父親では親としての役目が「遊び相手としての役割」に偏りがちなこと、「主たる養育者は母親である」という意識のあらわれであることなどが推測される(柏木, 2008)。これは、子育てにおける省察傾向がいずれの側面でも、どの時期においても、母親の方が高い方向にあるという結果とも関連することである。それに加えて、「⑥夜のつどい」や「⑩どんぐりの会」など、保護者の最初の予想以上に有意義であると感じた活動・行事があったことも面白い。この2つに共通する要素としては「子どもがそばにいる状況下での保護者同士の交流」があるが、それがまさに保護者が親として発達するために有意義なものであるということが言えるだろう。実際に、自分の子だけではなく他の子どもも含め、子どもは社会で育てるという実感を親子ともどもが持てるような働きかけをしている子育て支援施設も見られる(柏木, 2001)。愛媛大学附属幼稚園での活動・行事も、そのような意図を有し、それが現実的に保護者にとっても有効であることの示唆を得られた

のではないだろうか。

課題としては、1年弱という短い間での変化しか見られなかったということが挙げられる。附属幼稚園の活動・行事は無論毎年行われるものであることから、入園時と卒園時、その間に何度か調査を行い、データを収集することで、附属幼稚園の活動・行事が保護者にもたらす意味や意義を探ることができ、また保護者の養育者としての発達もより鮮明に見られることだろう。

## 文献

- Belsky, J., & Kelly, J. (1995) *The transition to parenthood*. New York: Dell.
- 江上園子 (2005) 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 発達心理学研究, 16, 122-134.
- 江上園子 (2007) “母性愛” 信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響——職業要因との関連—— 心理学研究, 78, 148-156.
- 亀口憲治 (1992) 家族システムの心理学：＜境界膜＞の視点からの家族を理解する 京都：北大路書房
- 柏木恵子 (2001) 子どもという価値——少子化時代の女性の心理 東京：中央公論新社
- 柏木恵子 (2008) 子どもが育つ条件——家族心理学から考える 東京：岩波書店
- 柏木恵子・東洋 (1977) 日米の母親における幼児への発達期待及び就学前教育観 教育心理学研究, 4, 242-253.
- 柏木恵子・若松素子 (1994) 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 (2002) 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から 発達心理学研究, 13, 30-41.
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 (1996) 子どもの発達と母子関係・夫婦関係——幼児を持つ家族について—— 発達心理学研究, 7, 31-40.
- Lamb, M. E. (1975) Fathers: Forgotten contributors to child development. *Human Development*, 18, 245-266.
- Lewis, C., & Lamb, M. E. (2003) Fathers' influences on children's development: The evidence from two-parent families. *European Journal of Psychology of Education*, 18, 211-228.
- 中道圭人・中澤潤 (2003) 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部紀要, 51, 173-179.
- 大野祥子 (2008) 育児期男性の生活スタイルの変化——“稼ぎ手役割”にこだわらない新しい男性の出現—— 家族心理学研究, 22, 107-118.
- 小野寺敦子 (2003) 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, 14, 180-190.
- 朴信永・杉村伸一郎 (2009) 幼児を育てている親の子育てに関する省察の3層モデルの検討 発達心理学研究, 20, 99-111.
- Parke, R. D. (1996) *Fatherhood*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Terry, D. J. (1991) Stress, coping and adaptation to new parenthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8, 527-547.

## 付記

本論文は、平成22年度教育学部長裁量経費による教育・研究促進（教育・学術研究助成）からの助成を受けた。課題名は「附属幼稚園における親の育児能力を伸ばし促進させるプログラムの開発」(研究代表者・江上園子)である。調査にご協力下さいました愛媛大学附属幼稚園の保護者の方々と先生方に心より感謝申し上げます。

